

## 事業概要書（だっぴ）

事業名	2018年7月西日本豪雨 被災地の若者応援プログラム～中高生・大学生と地域を結ぶコミュニティ支援				
開始日	2018年10月1日	終了日	2018年11月30日	日数	61日
団体名	NPO 法人 だっぴ				
(カウンターパート)	倉敷市教育委員会、矢掛高校、岡山大学教育学部				
担当者名	柏原拓史	スタッフ人数	3名		

事業費総額（税込）	500,000円
Civic Force 事業枠	500,000円
その他資金	0円

事業目的	被災した地域の中高生のキャリア支援と被災地内外の人々を結ぶコミュニティ支援
事業全体の概要	<p>●NPO 法人 だっぴとは</p> <p>「人づくり、地域づくり」をテーマに、主に中学生から大学生、若手社会人などを対象にしたキャリア支援を行っている。究極の目指す先は、地域にあるさまざまな課題を解決していきけるような若者を増やすこと。2010年の交流イベント開催以降、年に1度50人の若者と50人のゲストを迎えて開催する「だっぴ50×50」や、中学生向けの「中学生だっぴ」、「ぶちだっぴ」などの教育プログラムを展開。地域の魅力的な大人と地域の未来を担う若者が顔を見ながら交流する機会を創出している。主に岡山県内で活動。2013年に法人化後、2014年に初めて学校で「高校生だっぴ」を開催。現在は、そのノウハウを県内外に広げていくことにも重点をおいて活動している。</p> <p>代表理事：柏原 拓史</p>

### ●だっぴのプログラムとは

・中学生や高校生、大学生を対象に地域の大人との安心安全な交流を実現するプログラムで、NPO 法人だっぴが 2010 年より開発、提供している。具体的には、対象となる若者 4 人～5 人に対して、同数の地域の大人がグループになり、様々なテーマでフリップを用いてトークセッションを行う。その際に、会話の仲介役（場をよくするファシリテーター役）として講習を受けた大学生がキャストという役割で間に入り、グループでの場づくりに役割を発揮する。そうして、参加人数分のグループをつくり、司会が出す、働き方や生き方などについてのテーマに沿って自由に話し合う。効果として、「参加した若者の地元や社会へ関心が人を通じて高まる！」「若者が未来を考えるキッカケになる」「若者の行動する勇気が育つ」「若者をみんなで育てる地域に繋がる」などの効果があり、岡山県全域の中学、高校で導入が広がっている。

今回、被災した生徒向けに実施する内容としては、同じように被災経験を持つ地域の大人の方や傾聴が出来る社会人の人を対話役として参加頂くことで、生徒の心のケアと少しでも前に向く力に繋げることを目的に開催する。子どもたちにすぐに頑張れということや、前を向くことを強いるのではなく、同じ地域でひたむきに生きる大人との交流やその大人の様々な価値観に触れることで自身の心の声に少しでも向き合い、場合によっては言葉に出す安心と安全な空間があり、それを傾聴し、承認してくれる大人の存在が身近にあり、交流できるということを知ってもらうことに今回開催する意義があると考えている。

### ●被災地とのつながり・被災地での活動（予定）について

- ・ 10/17「だっぴ 50×50」@岡山県立矢掛高校：高校の授業の一環で、だっぴのメインプログラムである「だっぴ 50×50」を開催予定。テーマは「職業観の多様性」。主に被災した高校生を対象に、被災地の大人や大学生、東日本大震災の経験者などと交流しながら、胸にしまっている気持ちを安心して言葉に出し、未来に向かえるような機会とする。被災した高校生 82 名に対し、地域の大人が約 60 名、大学生が約 10 名参加して機会を届ける
- ・ 11/18「まびフェスティバル」@真備公民館：塾の経営者らが組織する「次世代スクールネットワーク」主催のイベントに「中高生が魅力的な大人と話を出来るプログラム」を提供する。被災地域の中心である真備地区で行うことで、被災した中高生らが参加しやすい状況にすると共に、被災していない中高生にも参加出来る機会にして被災地の課題について知らせる機会や心の距離を縮める機会にもする。
- ・ いずれも教育委員会や岡山大学教育学部などと協力して実施する。

### ●取り組むべき課題

・被災した生徒へのケア：被災した地域の生徒が通う高校では、学校支援コーディネーターの配置や被災した生徒への文房具の提供などさまざまなサポートを行っているが、生徒一人一人の状況を把握した上で適切なケアを行うことは簡単ではない。課題として、例えば被災した生徒を約 80 人抱える矢掛高校では、被災した生徒とそうでない生徒が入り混じった状態で、被災した生徒への心身の影響が懸念されている。

	<p>・被災地の現状・課題を知る機会の不足：最も被害の大きかった真備町などの被災地では、復旧・復興が遅れる中、地域を離れ他地域での生活を選択した人も少なくなく、町の空洞化が大きな課題となっている。課題解決のために、域内外の子どもたちが被災地の現状を知ること重要。被災地の現状を知らないことで、生徒同士が助け合う場面が減ってしまう可能性も。</p> <p>・矢掛高校以外の被災地の高校生・中学生：矢掛高校以外にも次の高校で被災生徒が存在する。総社南高校約 58 名、総社高校約 65 名、真備綾南高校約 23 名。それぞれに学校が独自に支援やケアを行っているが、行政として統一した支援は行われておらず、支援の“事例”について蓄積と共有、連携が必要と言える。(中高ともに)</p> <p>●<u>パートナー協働プログラム対象事業</u></p> <p>・「だっぴプログラム」を通じた被災地の中高生のサポート</p> <p>10 月と 11 月に実施するイベントを通じて、中高生が心を解放し未来に迎える機会を創出する。</p> <p>●<u>期待される効果</u></p> <p>・「だっぴプログラム」を通じて、被災地の中高生が悩みや不安を放出する。また、被災地内外の人が被災地について知る機会が増えることで、より一層の“助け合い”が生まれる</p> <p>・被災した高校生・中学生の事情を把握し、必要な支援につながる</p>
事業内容(事業種別 (コンポーネント) ごと)	裨益者 (誰が、何人)
<p>① 「だっぴプログラム」を通じた被災地の中高生のサポート (15 人日)</p> <p>A: 【矢掛高校での被災生徒へのプログラム】 10 人日</p> <p>→大人 60 人の確保 (声掛け、説明、調整など)</p> <p>→大学生 10 人声掛け (大学への協力依頼、声掛け、説明、調整など)</p> <p>→スケッチブックやプロッキーなど備品購入</p> <p>→プログラム企画 (関係者打ち合わせ、事前ヒアリングなど、資料作成)</p> <p>→当日の会場準備と大人、大学生への事前説明</p> <p>→プログラム進行と記録</p> <p>→実施結果のふりかえりと報告書作成</p> <p>→アンケート集計と今後についての協議と決定</p> <p>B: 【真備公民館での交流プログラム】 5 人日</p> <p>→近隣中学校、高校への説明と案内</p> <p>→事業告知チラシの作成と配布</p> <p>→協力頂く大人の方や大学生の確保 (声掛け、説明、調整など)</p> <p>→以下、上記 A と同様 (人数は大人と中高生共に最大 30 名、大学生 10 名)</p>	<p>岡山県内の生徒の被災状況 (※教科書、学用品等を必要とする人数 (7/31 時点の県発表))</p> <p>高校生：327 名</p> <p>中学生：628 名</p> <p>小学生 1,076 名</p>